

徂徠集・序類
訳注稿（六）

岡本光生
澤井啓一

徂徠集・序類 訳注稿(六)

岡本光生
澤井啓一

凡例

一、今回は次の三點を取上げた。

郡司火技序 卷九之五／享保九年・一七二四

復軒板君六十序 卷九之十一／同前

贈菅童子序 卷十一之一／同前

なお、送守緯適大垣序(卷十一之四 享保九年)に

ついては、日本思想大系36「荻生徂徠」(岩波書店)に西田太一郎氏の訓讀及び校注が收められているので、今回は割愛した。

郡司火技叙

41 海内言兵者、亡慮數十家。要_レ之不出_レ於甲越二氏所_レ爲法_一。(1) 它皆小有_レ所_レ縁飾_一、易_レ其名_一以求_レ售者已。何足_レ道哉。夫兵之毒、莫_レ火若_一、而火之技、有_レ異端_一。(3)

焉。二氏所_レ爲陳_一、前_レ火與_レ弧、而後_レ其戈矛、衷_レ以_レ旌旗、舍_レ馬而徒。彼我皆然。海内至于今_一宗_レ之、未_レ有_レ外_レ乎此_一以爲_レ陳者_レ也。然當_レ二氏之世_一、塵塵乎

有鳥銃耳。鳥銃百步而止⁽⁴⁾，火之毒未弘。故其爲陳若⁽⁵⁾，是其整矣哉。至于豐王時⁽⁶⁾，則有發⁽⁷⁾煩諸大礮屬出焉。其遠可⁽⁸⁾及三十里，火力所⁽⁹⁾至，段使二氏復出，豈能爲⁽¹⁰⁾其陳於前邪。然其物重，不可⁽¹¹⁾以移，其毒暴，不可⁽¹²⁾以近。人之力，莫⁽¹³⁾之能執，發⁽¹⁴⁾輒後卻，莫⁽¹⁵⁾之能制，人物爲⁽¹⁶⁾盡。是不⁽¹⁷⁾可⁽¹⁸⁾以置⁽¹⁹⁾于陳。故世之爲⁽²⁰⁾陳，至于今⁽²¹⁾猶⁽²²⁾故耳。數十年來，人迺稍稍嫻⁽²³⁾之熟。或至⁽²⁴⁾有⁽²⁵⁾一人之力能發⁽²⁶⁾百兩者。然亦千百人一人矣。豈足⁽²⁷⁾以爲⁽²⁸⁾陳哉。予嘗讀⁽²⁹⁾威元敬書⁽³⁰⁾，則佛狼機虎跋諸礮、車而列⁽³¹⁾之，進退利便，環則象⁽³²⁾城，儼忽變化⁽³³⁾，步⁽³⁴⁾騎翼⁽³⁵⁾之。毒是以神。以此爲⁽³⁶⁾陳，而後⁽³⁷⁾二氏之法可⁽³⁸⁾發矣。祇山東人鮮⁽³⁹⁾有⁽⁴⁰⁾能識⁽⁴¹⁾焉者。及⁽⁴²⁾因⁽⁴³⁾縣孝孺⁽⁴⁴⁾以見⁽⁴⁵⁾長人郡司君者⁽⁴⁶⁾，迺始得⁽⁴⁷⁾與聞⁽⁴⁸⁾其說。於是乎撫⁽⁴⁹⁾掌大言⁽⁵⁰⁾，天下亡⁽⁵¹⁾敵也。蓋佛狼機諸礮，其邦固有⁽⁵²⁾之。君復以⁽⁵³⁾其意造礮牀。初備人有⁽⁵⁴⁾旋風妙用諸牀，皆能畜弗⁽⁵⁵⁾卻。然過⁽⁵⁶⁾二十兩⁽⁵⁷⁾則敗。君之牀雖⁽⁵⁸⁾百兩弗⁽⁵⁹⁾復敗。牀凡三會⁽⁶⁰⁾，下設⁽⁶¹⁾機轉⁽⁶²⁾之。其輪如⁽⁶³⁾毛⁽⁶⁴⁾，左右前後，唯意所⁽⁶⁵⁾鄉⁽⁶⁶⁾。蓋礮之爲⁽⁶⁷⁾力，有⁽⁶⁸⁾畜輒激，激斯卻。故人莫⁽⁶⁹⁾如⁽⁷⁰⁾之何已⁽⁷¹⁾。

君迺以弗⁽⁷²⁾畜畜⁽⁷³⁾之，而後畜斯弗⁽⁷⁴⁾卻，洵天下之至巧也。君又曰，火之毒在⁽⁷⁵⁾硝。硝之巧在⁽⁷⁶⁾數。丸有⁽⁷⁷⁾輕重，筒有⁽⁷⁸⁾短長。劑⁽⁷⁹⁾二者而制⁽⁸⁰⁾之度，短究⁽⁸¹⁾于三寸九分，遠究⁽⁸²⁾于十里。肥人所⁽⁸³⁾傳，其數在⁽⁸⁴⁾三極與⁽⁸⁵⁾大衍⁽⁸⁶⁾焉。是謂⁽⁸⁷⁾衍極。復施⁽⁸⁸⁾諸火箭，彼圓此兌。是以其取⁽⁸⁹⁾數不⁽⁹⁰⁾齊，而會⁽⁹¹⁾于一，我所⁽⁹²⁾撈也。朝鮮諸術，先世所⁽⁹³⁾傳也。併錄以遺⁽⁹⁴⁾後人。子盍⁽⁹⁵⁾。夫人之爲⁽⁹⁶⁾技，皆以見⁽⁹⁷⁾其勇也。君迺制⁽⁹⁸⁾其器，定⁽⁹⁹⁾其數，用⁽¹⁰⁰⁾之陳，而使⁽¹⁰¹⁾人各爲⁽¹⁰²⁾勇。君之爲⁽¹⁰³⁾技，可⁽¹⁰⁴⁾謂⁽¹⁰⁵⁾進⁽¹⁰⁶⁾於技⁽¹⁰⁷⁾也已。予既已廢⁽¹⁰⁸⁾二氏之法，而有⁽¹⁰⁹⁾取⁽¹¹⁰⁾於君之技⁽¹¹¹⁾者⁽¹¹²⁾以⁽¹¹³⁾之。君名信之。其先世有⁽¹¹⁴⁾爲⁽¹¹⁵⁾郡司⁽¹¹⁶⁾者。故以⁽¹¹⁷⁾郡司⁽¹¹⁸⁾二氏，見⁽¹¹⁹⁾爲⁽¹²⁰⁾長馬監⁽¹²¹⁾云。享保九年甲辰春正月。

〔語注〕

(1) 字彙·序入字學爲書以傳者無慮數十家，要不越形聲之相益而已。漢書·趙充國傳入亡慮萬二千人。 (2) 史記·平津侯列傳入習文法吏事，而又緣飾以儒術。 (3) 論語·爲政入攻乎異端，斯害也已矣。

(4) 孟子・梁惠王上へ或百歩而後止V。(5) 漢書・韋玄成傳へ皇考廟、親末盡、如故V。(6) 左傳・成公二年へ師之耳目、在吾旗鼓。進退從之V、易・繫辭上へ變化者、進退之象也V。(7) 孟子・公孫丑下へ環而攻之而不勝V。(8) 楚辭・招魂へ往來儻忽V。(9) 易・繫辭上へ變化者、進退之象也V。(10) 楚辭・招魂へ步騎羅些V。(11) 詩・行葦へ以引以翼V。(12) 史記・平津侯列傳へ山東鄙人、不知其便若是V。(13) 世說新語・排調へ張之撫掌大笑V。(14) 莊子・齊物論へ大言炎炎、小言詹詹V。(15) 孟子・盡心下へ國君好仁、天下無敵焉V。(16) 孟子・告子上へ我固有之V。(17) 詩・烝民へ人亦有言、德輿如毛V。(18) 列子・湯問へ千變萬化、惟意所適V。(19) 論語・子罕へ吾未知之何也已矣V。(20) 莊子・養生主へ臣之所好者道也。進乎技矣V。

郡司火技叙⁽¹⁾

今、天下に軍事を論ずる者、おおよそ数十家いるが、要約すれば、武田信玄、上杉謙信の二氏の方法を越えておらず、少しく飾りたてて、名を易え、世に売り込もうとするものにすぎない⁽²⁾。なんら論ずるに足りないのだ。

そもそも、武器の威力は火器に及ぶものはなく、そして火器を取り扱う技術には多くに流派がある。武田、上杉の二氏の陣構えは、火器と弓矢とを持つ兵士を前列に配置し、戈矛を持つ兵士を後列に置き、中に徒士が旗指物を立て、馬を並べて徒歩で進む、というのであるが、「火器を取り扱う技術には多くの流派があるにもかかわらず」だれもかれもみなそうしていたのだ。天下は、今に至るまでそうしたやり方を尊んで受け継ぎ、これ以外の方法で陣構えをするものはいまだいないのである。しかし、二氏の時代はわずかに鳥銃しかなかったのだ。鳥銃は百歩(約一五〇メートル)ほどの射程距離しかなく、火の威力はそれほどひどく

はなかった。だから、その陣構えはこのようになっていたのだ。

豊王（豊臣）の時代に至ると、砲弾を発射する諸々の大砲がつぎつぎに出現した。砲弾の十里（約五五〇〇メートル）の遠くにまで到達し得るのは、火薬の力によるのであって、もしかりに武田、上杉の二氏がふたたび現れたとしても、大砲を陣の前列に配置することはしないはずである。しかしながら、その火器はきわめて重く、移動が不可能であり、その威力もあまりに甚だしすぎ、近づくこともできない。人間の力では、これを制御することができない。砲弾を発射すると、すぐさま反動で後退するのだが、これを制御することができず、人も物もみなこなごなになってしまふ。だから、陣中に配置することはできない。ゆえに世に行われている陣構えは今に至るまで、もとのままなのであった。ここ数十年來、人々は、ようやくしいにこれを扱うことに熟達してきて、なかには一人で百両の重さ（約三七〇〇グラム）の砲弾を発射するこ

とのできるものさえあらわれるに至った。しかし、それもまた千人百人中に一人、というのであって、陣中に配置することなど、とてもではししないのだ。

私は、かつて威元敬（3）の書を読んだことがあるが、それによれば「仏狼機」「虎駿」などの大砲は、車台に載せて配置し、進退の便をはかり、円形に並べれば城砦となり、たちまちのうちに陣形を変化させ、歩兵、騎兵がこれを補翼する、とある。大砲の威力はかくて神業となったのだ。「仏狼機」「虎駿」などで陣構えをなして、はじめて二氏の方法を廢することができたのだ。ただ山東の鄙人（江戸の人）の間においては、こうしたことがらを知るものが少ない。私は、県孝儒（山県周南）の紹介で長州の人、郡司君なるものに出会ふに及んで、ようやくはじめてその詳しい説明を聞くことができた。かくて手を打ち、「天下に敵なし」と大言した。「仏狼機」などの大砲は、もとより長州にあったのだが、君はみずからの着想によって砲床を製造した。初め、「旋風」とか「妙用」とかいった砲

に對して備人の手になる砲床があり、みな反動の力をたくみに蓄え、後退することがなかった。しかし、砲弾の重さが十兩（約三七〇グラム）を越えようと壊れてしまう。君の砲床は百兩の重さでも壊れないのだ。砲床は、三層に分れていて、いちばん下の層に機構を設け、転がして移動できるようにしてある。その動きの軽さは毛のごとくであつて、左右前後、思うままである。おそらく大砲の力というものは、蓄えられてもすぐさま激発し、激発すれば反動で後退する。ゆえに人間はこれを如何ともすることができないのだ。しかるに君は、力をうまく逃がす工夫をして、反動がないようにする、なんと巧みな工夫であることよ、まことに天下の至功である。

君はまた言った。「火器の威力は、火薬によつて決まる。火薬の巧みな用い方には一定の決まりがある。砲弾には軽重があり、砲身には長短がある。この二要素をはかつて火薬の用い方を決めれば、三寸九分の至近距離から十里の遠距離までを射程におさめる。肥人

の伝えるところによれば、その用い方の決まりは、天人「三極」のあり方と「大衍」の数との関係から導き出され、こうした導き出し方を「衍極」と言うのである。また火薬を火箭に装備することもある。前の砲弾は球形であるが、こちらは先が尖っている。だから火薬の用い方は異なるけれども、「三極」と「大衍」にかかわる、という点では同じところに帰着する。火箭のケースについては私の独創である。朝鮮の諸術は、祖先から伝えられてきたものであつて、併せて記録し、後の人々に遺すこととした。どうか、叙を書いてほしい。」

そもそも、人の技というものは、みなその勇氣を示すものである。君は、武器を制作し、火薬の量を定め、実際に陣中で使用できるようにして、人々がそれぞれに勇氣を発揮できるようにさせしめた。君の技たるや、たんなる技以上のものだと言ふべきだ。私が、二氏〔の陣構え〕の方法を廃してしまい、君の技を取り入れたのは、このような理由によるのである。君、

名は信之。その先祖に郡司となつたものがあるので、「郡司」をもって氏としたのであり、長州の馬監となつたという。享保九年甲辰春正月。

〔訳注〕

(1) 徂徠が軍事に関し強い関心を持っていたことについては「鉛録」などの著作のあることによつて明らかであるが、その基礎に幼児期の彼の体験、祖母の薫育があつたらしいことが、「鉛録序」の記述によつて推測される(平石直昭「荻生徂徠年譜考」寛文十年、徂徠五歳の項を参照)。なお、この叙は本文にもあるように享保九(一七二四)年の作。

復軒板君六十序

不佞茂卿、十四五時、從₍₁₎先君子、東游₍₂₎于房總。總之南、蓋有₍₃₎帆丘之山云。廼板倉氏之虛也。荒廢百年、城復₍₄₎于隍、然其顛猶有₍₅₎壘壁臺池之遺、隱隱可₍₆₎睹已。左控₍₇₎高原、右帶₍₈₎瀧水、東嚮以₍₉₎眺、屬₍₁₀₎郷二十有四、

(2) 江戸時代には戦国時代の名将、武田信玄、上杉謙信などの実戦歴が回顧され、たとえば、小幡景憲の甲州流、沢崎景実の越後流、北条氏長の北条流などの近世兵法学の諸流派が誕生した。それらが、いずれも信玄、謙信の戦術を基礎に展開されているので、徂徠は本文のように述べたのであろう。

(3) 威継光は明の嘉靖年間の人。福建総督に陞り、しばしば劇賊を平らげた。のち、都督同知から太子保に累官す。読書を好み、経史の大義に通じた、という。著書に「紀効新書」「練兵実記」などがある。ここで徂徠の読んだという書は「紀効新書」であろう。(岡本)

可₍₁₁₎俯窺₍₁₂₎焉。外之九十九里之沙、大海御₍₁₃₎之、遙碧₍₁₄₎彎然。風雨或晦、滔天之濤、若₍₁₅₎蹴₍₁₆₎林杪₍₁₇₎以來者焉。時時₍₁₈₎陟₍₁₉₎其顛、以眺₍₂₀₎日月之所₍₂₁₎繇出₍₂₂₎、雲物之所₍₂₃₎儼忽變眩₍₂₄₎、風颯颯然以來。其下彷彿乎若₍₂₅₎有₍₂₆₎蓬萊靈仙之宅、

神之與往、冀之不_レ可_レ得也、惘惘然以下。下則或與_二鄉父老_一相語、頗有能道_二勝國時事_一者、俾_二其戰績_一、歷歷指言之、若在_二目也_一。悵然以想、然當_二其時_一、寧何能識_二其裔孫_一為_二誰某_一、今在_二何處_一邪。暨乎十許年前、與_二武文安_一相識、而得_レ見_二其嶽尊復軒君者_一。廼友庵先生之外孫也。友庵先生者、則吾姑丈李庵先生之叔父也。語次所_レ及、為_二之惋然_一。今年春、復軒君儼然辱_レ臨、尋_二其舊盟_一、又攜_二其仲子美仲_一、為_二之行_一束脩、以見_レ之、美仲年甫十六、聰慧善_二詩文_一、才思日上、汗血駒也。亦惟復軒君、好讀_レ書、六十年如_二一日_一、蒸蒸之化、有_二以被_レ之_一。講業之餘、時聞_二美仲之敘_一其先世也、廼始識_二帆丘之後_一、是其人矣、則為_二之恍然_一。居亡_レ何、六月九日、為_二復軒君覽揆之辰_一也。美仲來、而謀地所_レ以為_二之壽_一、侑_二其觴_一者_二天_一。物子曰、吾豈敢也。吾聞_レ之、昔者豐王之東征也、偏師以徇_二房總_一、一日而下_二數十城_一、帆丘與_レ焉。數十城之裔、散為_二庶人_一。其僅得_レ以仕_二于諸侯之邦_一、而列_二君子林_一者、可_レ俚指數、猶以為_レ幸哉。廼尊公委_二質親藩_一、值_二風雲之會_一、為_二代

來臣。當_二其世_一、而獲_二奮然致_二身_一本朝之上、三增_二秩為_二今官_一、何榮也。在_レ公之暇、廼好讀_レ書、六十年如_二一日_一弗_レ倦、何健也。子昆季三人、或武或文、咸奉_レ教幹_二其靈_一、何樂也。是其福祿之來、滾滾乎未_レ已。豈容_二予言_一。且也室町氏以際_二勝國_一、人之無_レ壽者久矣。值_二天地之不_レ好_レ德、人日尋_二于戈_一三百餘年。君之先城_二帆丘_一者、豈非_二其時_一乎。于_二其時_一、雖_レ有_二仁人_一、君子、不_レ能_レ躬享_二之福_一、而必貽_二諸後世_一。惟我_レ神祖、降_二德于下民_一、離_二其塗炭_一。列朝累洽、仁霑_二乎無外_一、而天地不_レ愛_レ福、故人之多_レ壽、宜_レ莫_二今日若_一矣。以_二尊公_一而值_二今之時_一、雖_レ無_二先世之積以發_一、必將_レ裕_二諸其躬_一也。是豈容_二予言_一。雖然、尊公承_二帆丘之後_一、而弗_レ能_レ躬目_二其勝_一也。予躬目_二其勝_一、而弗_レ獲_二其人_一、歷數十年、而弗_レ能_レ忘_二于懷_一。今獲_二之尊公_一者、是宜若_レ不_レ無_二予言_一。況有_二家世之舊_一也、況子之命_レ之也。廼作_二詩五章_一、授_二之觴_一者。

帆丘海母、以瞰_二大海_一、大海無_レ涯、福祿何已、君子以者。一章

維海出風、其來自東、草木美好、福祿攸造、君子其老。二章

維海出雲、降雨芬芬、百穀咸膏、福祿浩浩、君子其耆。三章

維海之谷、吐日飲月、經天無極、福祿無缺、君子其蕃。四章

維海之洲、列仙攸游、詒我期頤、靈草歲歲、君子味之。五章

〔語注〕

- (1) 禮記·檀弓上入子之先君子、喪出母乎。(2) 戰國·秦策入使東遊韓魏、入其將相、北遊燕趙、而殺李牧。(3) 左傳·昭公十七年入大辰之虛也。(4) 隋書·李崇傳入城本荒廢、不可守禦。(5) 易·泰入城復于隍。(6) 史記·白起傳入趙軍築壘壁而守之。(7) 歐陽脩·王彥章畫像記入歲久磨滅、隱隱可見。(8) 漢書·揚雄傳入窮冥極遠者、相與迺虛高原上。(9) 文中子·王道入鳥鵲之巢、可俯而窺也。(10) 列

- 子·湯問入沈於大海。(11) 劉禹錫·白鷺樵詩入前山正無雲、飛去入遙碧。(12) 張籍·樵客吟入竹擔鸞彎向身曲。(13) 詩·鄭風·風雨入風雨如晦。(14) 書·堯典入浩浩滔天。(15) 柳宗玄·登西山詩入縈迴出林杪。(16) 史記·酈食其傳入時時間邑中豪賢。(17) 杜甫·贈鄭諫議詩入思飄雲物外。(18) 楚辭·招魂入雄虺九首、往來儻忽、張衡·西京賦入奇幻儻忽。(19) 左傳·襄公二九年入爲之歌魏、曰、美哉、颯颯乎。(20) 賈誼·旱雲賦入時彷彿而有似、揚雄·甘泉賦入猶彷彿其若夢。(21) 山海經·海內北經入蓬萊山、在海中、孫綽·天臺山賦入涉海則有方丈蓬萊。(22) 孫綽·天臺山賦入靈仙之所窟宅也。(23) 世說新語·言語入謝太傳曰、當爾時、覺形神俱往。(24) 莊子·庚桑楚入汝亡人哉、惘惘乎。(25) 史記·馮唐傳入父老何目爲郎。(26) 周禮·地官·媒氏入聽之于勝國之社。(27) 周禮·地官·遂師入移用其民、以救其時事、荀子·王制入論百工、審時事。(28) 古詩十九首·七八衆星向歷歷、晉書·劉寔傳

- △歷歷相次、不可得而辭也▽。(29)陶潛・與從弟敬遠詩△傾耳無希聲、在目皓已潔▽。(30)宋玉・神女賦序△悵然失志▽、傅亮・感物賦△悵然有懷、感物興思▽。
 (31)風俗通・六國△趙之先與秦同祖、其裔孫曰造父▽。
 (32)左傳・襄公二十九年△見子產、如舊相識▽。(33)史記・黥布傳△從容語次、譽赫長者也▽。(34)晏子・問・下△夫儼然辱臨敝邑▽。(35)左傳・哀公十二年△吳子使大宰嚭請尋盟▽、書言故事・評論類△尋舊約、日尋盟▽。(36)論語・述而△自束脩以上、吾未嘗無誨焉▽。(37)漢書・佞幸傳△善騎射聽慧▽、後漢書・孔融傳△融年十二、聰慧▽。(38)南史・褚裕之傳△仲寶少孤貧、篤志好學、有才思▽。(39)蘇軾・次孔文仲見贈詩△君如汗血馬、作駒已權奇▽。(40)漢書・張良傳△少時家貧、好讀書▽。(41)後漢書・謝弼傳△願陛下仰慕有虞蒸蒸之化▽。(42)史記・太史公目序△講業齊魯之都▽、潘尼・釋奠頌△講業既終、精義既研▽。
 (43)孔子家語・五儀解△其先世殷王太戊▽、陶潛・桃花源記△先世避秦時亂▽。(44)吳船錄・九月丙寅條△恍然如隔世焉▽。(45)漢書・翟方進傳△居亡何▽。
 (46)楚辭・離騷△皇覽揆餘于初度兮▽。(47)齊東野語△執板奏歌侑觴▽。(48)論語・述而△若聖與仁、則吾豈敢▽。(49)詩・小雅・漸漸之石△武人東征▽、孟子・滕文公下△東征緩厥士女▽。(50)左傳・宣公十二年△嬖子以偏師陷▽、潘岳・關中詩△偏師作援▽。
 (51)漢書・陳餘傳△夫武臣張耳陳餘、…下趙數十城▽。(52)論語・季氏△天下有道、則庶人不議▽、史記・萬石傳△贖免爲庶人▽。(53)易・比△親諸侯▽、書・禹貢△三百里諸侯▽。(54)司馬遷・報任少卿書△可以託於世、列於君子之林矣▽。(55)荀子・儒效△雖有聖人之知、未能僂指也▽。(56)左傳・僖公二十三年△策名委質▽。(57)王粲・雜詩△遭遇風雲會▽。(58)史記・孝文帝紀△上從代來初即位、…乃修從代來功臣▽。(59)歐陽脩・王彥章書像記△獨公奮然自必、不少屈懈▽。
 (60)論語・學而△事君能致其身▽。(61)孟子・萬章下△立乎人之本朝▽。(62)史記・平準書△爲郎增秩▽。(63)詩・召南・小星△夙夜在公、寔命不同▽。(64)易・

繫辭上△通其變、使民不倦▽。(65)徐陵・爲貞陽侯與王僧辯書△孤二三昆季▽、唐書・李密傳△今不昆季盡行以爲愧▽。(66)易・蠱△幹父之蠱、有子考无咎▽、顏氏家訓・治家△不可使幹蠱▽。(67)詩・小雅・瞻彼洛矣△君子至正、福祿如茨▽、同前・鴛鴦△君子萬年、福祿宜之▽。(68)杜甫・登高詩△不盡長江滾滾來▽。(69)左傳・昭公元年△日尋干戈▽。(70)書・仲虺之誥△惟皇上帝降衷于下民▽。(71)書・仲虺之誥△有夏昏德、民隕塗炭▽。(72)班固・東都賦△至於永平之際、重熙而累洽▽。(73)曹植・七啓△惠澤播於黎苗、威靈震乎無外▽。(74)春秋繁露・循天之道△仁人之所以多壽者▽。(75)世說新語・言語△未能忘懷▽。(76)漢書・張良傳△家世相韓▽、同前・匡衡傳△家世多爲博士者▽。(77)莊子・養生主△吾生也有涯、而知也無涯▽。(78)易・坤・文言△天地變化、草木蕃▽。(79)管子・四稱△今若君之美好而宜通也▽。(80)管子・度地△降雨下、山水出▽。(81)詩・小雅・信南山△苾苾芬芬、祀事孔明▽、揚雄・甘泉賦△苾苾芬芬▽。(82)左傳・

襄公十九年△如百穀之仰膏雨焉▽。(83)詩・小雅・雨無正△浩浩昊天、不駿其德▽、禮記・中庸△淵淵其淵、浩浩其天▽。(84)張衡・西京賦△欲澧吐瀉▽。(85)史記・天官書△其出不經天▽。(86)左傳・僖公二四年△女德無極▽。(87)左傳・僖公十九年△無闕而後動▽。(88)班固・西都賦△實列仙之攸館、非吾人之所寧▽。(89)禮記・曲禮上△百年曰期頤▽。(90)張衡・西京賦△靈草冬榮、神木叢生▽。(91)左思・蜀都賦△敷藥歲蕪▽、陸機・文賦△紛葳蕪以駭速▽。

復軒・板君の六十の序⁽¹⁾

私、茂卿は、十四、五歳のときに、亡き父に従って房総に遊んだことがある。⁽²⁾上総の南に帆丘という山があり、そこが板倉の城跡である。百年の間に荒廃して、すっかり空堀となっているが、その頂上にはまだ城塞や池に臨んだうてな跡が残っていて、かすかにそれと認めることができる。左には高原があり、右には瀟水(夷隅川)がめぐり、東に向かって開けてい

て、ふもとの二十四カ村を眼下に見渡すことができ
る。その先にある九十九里の砂浜は大海原に続き、は
るかに靑空が弓なりに曲っている。雨風のときには暗
い空の下、天にとどくほどの高波が林の梢に襲いかか
る。ときおり、その頂上に登り、日や月の出るさま
や、風景がたちまちに変化するさまを眺めていると、
風が心地好く吹いてくる。そうしていると、あたかも
蓬萊山の神仙の住まいがあって、神仙と共にいられる
かのごとくであるが、そう願っても適うわけもなく、
ぼんやりと山を降りる。ふもとに着くと、土地の老人
たちと語り合うこともあった。そのなかに前代「豊臣
秀吉の時代」の出来事をよく話す者がいて、当時の戦
いのあり様を褒めたたえ、指さしながらありありと話
してくれたので、まるで目の当たりにするようであつ
た。私は、心を痛めながら物思いにふけたが、当時
は、その子孫が誰であるか、いま何処に住んでいるか
など考えもしなかった。

十年ほど前に、武文安（武田文安）⁽³⁾と知り合いとな

り、その岳父の復軒君なる者に会うことができたが、
彼は友庵先生⁽⁴⁾の外孫であった。友庵先生は、我が父の
姉妹の夫である李庵先生⁽⁵⁾の叔父に当たる。話のついで
にこうした事に及んで、お互いに驚嘆したのであった。
今年の春に、復軒君は威儀を正して我が家を訪れ、古
い誼みをあたためたうえで、一緒に連れてきた次男の
美仲⁽⁶⁾を私の下に入門させる礼をとった。美仲は十六歳
になったばかりで、聡明なうえに詩文に巧みであり、そ
の優れた才智が日々に上達してゆく汗血馬といえる。
これも、復軒君が、六十年の間かわることなく、よく
書物を読んで向上してきたことの感化である。授業の
合間に、美仲がその祖先について述べるのを聞いた。
そこで、始めて彼が帆丘の後裔であることを知り、う
っとりとした気分になった。

ほどなくした六月九日、この日は復軒君の誕生日で
ある。美仲が来て、復軒君の長寿を祝うために酒杯を
あげ「てお祝いの言葉を述べ」ることを私に相談され
た。そこで物子は次のように述べよう……

私はどうしてそんな大それたことをしようか。昔、豊王（豊臣秀吉）が東征したとき、小人数の軍隊が房総を攻めて一日に数十の城を下し、帆丘もそこに含まれていたと聞いている。数人の城の末裔は四散して平民となっており、かろうじて諸侯に仕えて士人の中に加わることができた者はすばやく指折り数えられるほどしかないが、それでも幸いなことである。ところが、あなたのお父上は親藩に仕官されたうえに、時變に⁽⁷⁾応じて才能を発揮し、新將軍につき従って幕府のために命を捧げ、三度も俸禄を増されて現在の官位となっている。なんとも荣誉なことである。公務の傍ら、六十年間かわることなくよく書物を読んで怠ることがない。なんとも壮健なことである。子息は、兄弟三人、⁽⁸⁾ある者は「武」に、ある者は「文」にと、父上の教えを守ってそれぞれの事に従っている。なんとも楽しみなことである。これは、その幸いと秩禄が絶えずやってきて尽ることがないということである。どう

して私のお祝いの言葉などが入りこむ余地があらうか。

さらには、室町から前代に至るまでの久しい間、人々は長命でありえなかった。天地が徳を好まなかったことに遭遇し、人々は戦いに明け暮れて三百年余りが過ぎた。帆丘に城を築いたあなたの父祖も、そうした時代にいたのではないか。こうした時代では、たとえ「仁人」や「君子」であっても、自分の身に幸福を受けて、それを子孫に残すことはできない。ただ我が神祖（徳川家康）がその徳を人民に降りそそいで苦難から救ってから、代々泰平が続き、その仁政を遠方にまで施している。天地が福を惜しむことなく人々が長寿でいられることは、今日をおいてほかにはない。あなたのお父上は、こうした今の時世に遭遇しているのだから、父祖の蓄積が現われなくとも、必ず自分の身に長寿を備えられることであろう。だから、どうしてお祝いの言葉が入りこむ余地があらうか。

そうはいっても、あなたのお父上は、帆丘の後裔で

ありながらも、ご自身が帆丘の景勝を目にされたことはない。私は、景勝を目にしながらも、当時にはその子孫を知らず、数十年を経ても、そのことが心のうちから忘れ去らなかつた。今、あなたのお父上を知ることができたからには、どうも私のお祝の言葉がなくてはならないようである。まして父祖の代からの旧い誼みがあり、子「である美仲」に命ぜられたことであればなおさらのことである。そこで詩五章を作つて、お祝いの酒杯をあげることにしよう。

帆丘は青々と茂つており、大海原を眼下に眺めることができる。大海原は果てしなく続き、そのように幸いと秩祿も限りがない。君子は六十歳である。(一章)

大海から風が吹きわたってきたが、それは東方から吹いてくる。そのため草木は美しく茂つており、そのように幸いと秩祿も進んでゆく。君子は七十歳である。(二章)

大海から雲が湧き、雨が盛んに降ってくる。諸々の穀物はその恵みをうけているが、そのように幸いと秩

祿も豊である。君子は八十歳である。(三章)

大海の中の深い谷から、日月が出たり沈んだりする。日月は天をめぐつて終わることがなく、そのように幸いと秩祿も欠けることがない。君子は九十歳である。(四章)

大海にある島は、神仙たちが遊ぶところである。ここには、我々に百歳の寿命を与える靈草が美しく茂っている。君子よ、これを味わい給え。(五章)

〔訳注〕

(一) 板倉復軒は、享保十三年(一七二八)に六十四歳で亡くなっているから、そこから享保九年(一七二四)に本作品が書かれたと判断できる。

板倉復軒、名は九、字は惇叔(あるいは惇叙)、は、木下順庵門下で、三十歳の時に甲府侯であった徳川綱豊(のち家宣)に仕え、のちに幕臣となつて勘定方を勤め、三ノ丸留守居役にまで進んだ。復軒の経歴については、服部南郭「版倉君墓誌銘」(『南

郭先生文集』二編・巻之八)に詳しく、また『先哲叢談』後編三にもみえる。

(2) 徂徠は、延宝七年(一六七九)十四歳のとき、父方庵の江戸追放によって上総の本納村に住み、天和三年(一六八三)に武射郡横地下村に移るまで、そこに暮らしている。本文の記述から判断すると、徂徠が「帆丘」の旧城を訪れたのは、本納村に移住してまもなくのことだと考えられる。

なお、詳細は不明であるが、「帆丘」と本納村とはほぼ同じ場所と考えられる。昭和九年に発行された岩橋遵成『徂徠研究』(ここでは昭和四十四年に名著刊行会から復刻されたものを使用)では、徂徠が移住した本納村の現在地名として「長生郡帆丘町本納」を挙げている。

(3) 武田文安、名は敬信、号は広陵、は、幕府医官で、板倉復軒の長女と結婚したが、享保五年(一七二〇)に三十三歳で亡くなっている。『徂徠集』巻十四所収の「医官広陵文安甫之墓碑」に略歴がみえ

る。

(4) 「友庵先生」なる人物については、本文にみえるように板倉復軒の母方の祖父に当たるが、それ以上のことはよくわからない。

(5) 「李庵先生」についても、徂徠の父の姉妹の夫であること以外は不明である。

(6) 板倉美仲、名は安世、号は溪また帆丘、は、幕臣であるが、延享四年(一七四七)に三十九歳で亡くなっている。

(7) 原文は「為代来臣」とあり、語注に示したように『史記』孝文帝紀の文章に拠っている(『徂徠先生文集解』を参照)。この『史記』の文章は、孝文帝が「代」の地から来て新しい皇帝となると、以前から「代」において仕えていた臣下が朝廷に入り込んだことを記したものである。板倉復軒は、注(1)に示した服部南郭の「版倉君墓誌銘」によると、甲府侯であった徳川綱豊に、はじめ「侍史」としてのちに「書院番」として仕えていたが、宝永元年(一

七〇四) 綱豊が五代將軍綱吉の養嗣子となり、家宣と改名して西ノ丸に移るとともに、幕府の勘定方を勤めるようになった。宝永六年(一七〇九)に家宣が六代將軍に就任するとともに勘定方組頭となったという。こうした復軒の経歴ともつき合わせると、この一文は、復軒の身分が陪臣から幕臣へと移動したことを指していると解釈できる。

(8) 次男は本文中にみえる板倉美仲であるが、長男

贈菅童子一序

享保甲辰秋七月、菅童子年十三、以試賦詩讀未見書、特賜稟奉二百石、奉朝請、以從諸博士之列。當其時、都下聞者、莫不驚嘆嗟異、奔走以相傳誦嘖嘖、謂爲三百年來希觀盛事也。童子家大人爲暨官李陰先生。童子生而備異靈慧、迺弗屑爲軒岐家之言。蒐獵經史、諷詠菁華、迺又弗屑爲黃傭氏之讀。先生爲謀其所問業、則曰吾其奚師。亡已乎其赤城邪。時予尙在赤城。赤城者謂予也。於是乎來

は惇行、名は敬徳、号は蘭溪といい、父の跡を継いだ。三男は美淑、名は経世、号は龍洲という。服部南郭の「版倉君墓誌銘」によると、次男の美仲と三男の美淑は、ともに徂徠のもとで学んでいる。なお、長澤孝三編『漢文学者総覧』(汲古書院)には、長男の惇行も徂徠に学んだと記されているが、服部南郭の「版倉君墓誌銘」に拠るかぎり、そうした事實は確認できない。(澤井)

見予。予一見以識其爲渥注駒哉。予廬相距頗遙、而童子尙幼、弗勝衣、弗能履屐乎道塗。婁來見予、則俾太宰德夫往視其業。德夫倡以華音、則童子愈益孜孜弗已。慨然自謂彼中人也。居亡何、迺有今日命云。是日先生置酒高會。吾黨諸子悉集、童子爲主。酒酣諸子各有贈言。予曰、麟鳳龜龍瑞芝朱草者、王者之祥也。王者之德隆盛、和氣洋溢乎兩間、浮遊乎宇宙、紈緼化醇、所燕以生。故不恆

有焉。惟人亦然。韓·彭·絳·灌雲⁽⁴⁵⁾與于楚漢之際、而文景之世、賈誼·司馬遷·相如·枚乘·嚴丘·虞丘壽王之徒、繼踵、比肩以出。是寧特其性異、稟然哉。亦時乎有以化之也。惟吾⁽⁴⁸⁾神祖既定⁽⁴⁹⁾海內、偃武修文、夙收⁽⁵⁰⁾羅山于西畿、煦濡以成⁽⁵¹⁾其學、終爲⁽⁵²⁾一代儒宗。然是時戰國之習未盡除。以故京洛獨稱⁽⁵³⁾人文淵藪。而十數年來、操槩之士、迺益彬蔚⁽⁵⁴⁾于東都。豈輦轂之下、首善之地、風教所自、愈久愈盛乎。故知⁽⁵⁵⁾列聖相承、累治重熙、百年之久、所⁽⁵⁶⁾陶育以鼓鑄⁽⁵⁷⁾。蓼蕭棣棣之化、於⁽⁵⁸⁾斯爲⁽⁵⁹⁾盛。則鬻髮之英、亦人之麟鳳龜龍瑞芝朱草哉。夫至和所翔、靡⁽⁶⁰⁾遠弗⁽⁶¹⁾屆、靡⁽⁶²⁾幽弗⁽⁶³⁾徹、窮⁽⁶⁴⁾陬下邑、于⁽⁶⁵⁾何弗⁽⁶⁶⁾有。而童子躬生⁽⁶⁷⁾於朝紳之家、遠⁽⁶⁸⁾天尺五、鶴唳蚤聞、好爵縻⁽⁶⁹⁾之。榮亦大矣哉。雖然⁽⁷⁰⁾國家設⁽⁷¹⁾制、崇⁽⁷²⁾高豐大、比⁽⁷³⁾隆⁽⁷⁴⁾三代、予⁽⁷⁵⁾跼⁽⁷⁶⁾伏侯⁽⁷⁷⁾邸之末、側⁽⁷⁸⁾聞除目之所⁽⁷⁹⁾遷轉、增⁽⁸⁰⁾秩萬石、晉⁽⁸¹⁾爵大夫、率無⁽⁸²⁾虛歲。而都人耳目所⁽⁸³⁾狃、玩愒爲⁽⁸⁴⁾常、恬且不⁽⁸⁵⁾駭。迺今童子之所⁽⁸⁶⁾爲榮、博士賤矣、二百石微矣、而其驚嘆嗟異、奔走弗⁽⁸⁷⁾已、嘖嘖以相傳誦者、獨何哉。

蓋⁽⁸⁸⁾聖德方明、昭曠日躋、勳⁽⁸⁹⁾精爲⁽⁹⁰⁾治、迺舉⁽⁹¹⁾百年之曠典、破⁽⁹²⁾時俗之拘攣、俾⁽⁹³⁾海內之民、由⁽⁹⁴⁾是曉然以知⁽⁹⁵⁾□上攸⁽⁹⁶⁾好學、而歲時條令所⁽⁹⁷⁾勸督、非⁽⁹⁸⁾文具⁽⁹⁹⁾也。其效已見⁽¹⁰⁰⁾於今日者如此。則過⁽¹⁰¹⁾此以往、仁聲迺⁽¹⁰²⁾卒、民應如⁽¹⁰³⁾響。何翅⁽¹⁰⁴⁾一童子之榮哉。吾儕陪臣、亦爲⁽¹⁰⁵⁾斯文⁽¹⁰⁶⁾慶之。若夫童子遠惟⁽¹⁰⁷⁾□列朝培育之化、有⁽¹⁰⁸⁾以⁽¹⁰⁹⁾使⁽¹¹⁰⁾之、近惟□當今拔擢之恩、有⁽¹¹¹⁾以⁽¹¹²⁾榮⁽¹¹³⁾之。益懋⁽¹¹⁴⁾其德、追⁽¹¹⁵⁾躋⁽¹¹⁶⁾林公、以供⁽¹¹⁷⁾國家異日之用者、是家人父子相勉勵之意。先生在焉。何俟⁽¹¹⁸⁾予言。言畢、童子蹶然興而離⁽¹¹⁹⁾席以言曰、而今而後、吾知⁽¹²⁰⁾□大恩之不⁽¹²¹⁾私哉。小子雖⁽¹²²⁾不敏、其不愈⁽¹²³⁾益自奮思⁽¹²⁴⁾所對⁽¹²⁵⁾敷⁽¹²⁶⁾□上之德意⁽¹²⁷⁾乎。因請而俾⁽¹²⁸⁾書。

〔語注〕

(1) (蘇軾)赤壁賦入橫槩賦詩、固一世之雄也。(2) 後漢書·黃香傳八年十二、博通經術、京師槩曰、天下無雙、江夏黃童。初除郎中、肅宗詔香詣東觀、讀所未見書。(3) 漢書·楚元王傳入關內侯奉朝請。(4) 吳志·呂據傳入遣從兄慮、以都下兵、逆據於江都、

左右勸據降魏▽。(5)南史·梁元帝紀△即誦上篇、左右不莫驚歎▽。(6)南史·阮孝緒傳△鄰里嗟異之▽。(7)書·武成△邦甸侯衛、駿奔走▽。(8)宋史·范質傳△時人傳誦、以爲勸戒▽。(9)畫鑿△旁觀數士人、嗟咨嘖嘖之態▽。(10)(魏·文帝)典論·論文△文章經國之大業、不朽之盛事▽。(11)詩·芄蘭△童子佩觿▽。(12)晉書·姚興載記△三秦饒俊異▽。(13)(張君祖)詩△聖人如影響、靈慧陶億却▽。(14)(高啓)詩△坐談周孔雜軒岐▽。(15)(何承天)安邊論△蒐獵宜其號令、俎豆訓其廉耻▽。(16)蜀志·尹默傳△受古學、皆通經史▽。(17)晉書·應詹傳△優游諷詠、無所標明▽。(18)晉書·文苑傳序△翰林總菁華、典論詳其藻綉▽。舊唐書·薛戎傳△論語者六經菁華、孝經者人倫之本▽。(19)孟子·梁惠王上△無以則王乎▽。(20)白虎通文質△大小國諸侯、皆來見▽。(21)孟子·滕文公下△今一見之、大則以王、小則以霸▽。(22)史記·樂書△嘗得神馬渥洼中▽。(23)禮記·檀弓下△趙文子、退然如勝衣▽。(24)莊子·馬蹄△蹶蹶爲仁、踉蹌爲義▽。(25)

禮記·儒行△道塗不爭險易之利▽。(26)書·益稷△予思日孜孜▽。(27)(潘岳)秋興賦△慨然而賦▽。(28)漢書·翟方進傳△居亡何▽。(29)漢書·高帝紀上△漢王遂入彭城、收羽美人貨賂、置酒高會▽。(30)論語·公治長△吾黨之小子狂簡▽。(31)(李華)與外孫崔氏二孩書△今者諸子日出高眠▽。(32)吳志·朱桓傳△以逸待勞、爲主制客▽。(33)史記·高祖紀△酒酣舉筑、自爲歌詩▽。(34)荀子·非相△故贈人以言、重於金石珠玉▽。(35)禮記·禮運△麟鳳龜龍謂之四靈▽。(36)(杜甫)橋陵詩三十韻因呈縣內諸官詩△瑞芝產廟柱、好鳥鳴巖扇▽。(37)大戴禮記·盛德△朱草日生一葉▽。(38)大學章句序△宋德隆盛、治教休明▽。(39)禮記·祭義△有和氣者、必有愉色▽。漢書·王褒傳△思從祥風翔、德與和氣游▽。(40)禮記·中庸△是以聲名洋溢於中國▽。(41)宋史·胡安國傳△至剛可以塞兩間▽。(42)史記·屈原傳△蟬蛻於濁穢、以浮游塵埃之外▽。(43)莊子·知北遊△外不觀乎宇宙、內不知乎太初▽。(44)易·繫辭下△天地絪縕、萬物化醇▽。(45)(陸機)

漢高祖臣頌入奮臂雲興、騰跡虎噬。(46)晏子春秋·雜下入比肩繼踵而在。(47)(陳孔璋)答東阿王牋入此乃天然異粟。(48)史記·淮陰侯傳入功者難成而易敗、時者難得而易失也、時乎、時不再來。(49)史記·高祖本紀入威加海內。(50)書·武成入偃武修文。(51)(班固)西都賦入橫被六合、三成帝畿。(52)莊子·天運入相煦以濕、相濡以沫。(53)史記·叔孫通傳入卒爲漢家儒宗。(54)易·賁入觀乎人文、以化成天下。(55)書·武成入萃淵藪。(56)晉書·文苑傳序入當塗基命、文宗鬱起、彬蔚之美、競爽當年。(57)(班固)東都賦入東都主人、喟然而歎曰、痛乎風俗之侈人也。(58)(司馬遷)報任安書入僕賴先人緒業、得待罪輦轂下、二十餘年矣。(59)史記·儒林傳入故教化之行也、建首善、自京師始。(60)詩·大序入風以動之、教以化之。(61)(左思)魏都賦入且魏地者、畢昂之所應、虞夏之餘人、先王之桑梓、列聖之遺塵。(62)易·歸妹入跛能履吉、相承也。(63)(班固)東都賦入至永平之際、重熙而累洽。(64)(陸機)策秀才文

入二儀所以陶育、四時所以化生。(65)(白行簡)金在鎔詩入堅剛由我性、鼓鑄任君心。(66)詩·棫樸入凡棫樸、薪之樞之。(67)論語·泰伯入唐虞之際、於斯爲盛。(68)詩·思齊入古之人無斃、譽髦斯士。(69)書·大禹謨·傳入至和感神。(70)書·大禹謨·張徹會合聊句入朝紳鬱青綠、馬飾曜珪珎。(72)(杜甫)贈韋七贊善詩入爾家最近魁三象、時論同歸尺五天。(73)晉書·謝玄傳入餘衆棄甲宵遁、聞風聲鶴唳、皆以爲王師。(74)易·中孚入鳴鶴在陰、其子和之。我有好爵。吾與爾靡之。(75)易·繫辭上入縣象著明、莫大於日月、崇高莫大乎富貴。(76)易·豐入象曰、豐、大也。明以動也。(77)漢書·刑法志入未能稱意比隆於古。(78)論語·衛靈公入斯民也、三代之所以直道而行也。(79)(王延壽)魯靈光殿賦入狡免踰伏於柎側、狡狴攀椽而相追。(80)列子·天瑞入夫子嘗語伯昏矛人、吾側聞之。(81)(姚合)武功縣中詩入一日看除目、終年損道心。(82)論衡·初稟入仕者

隨秩遷轉▽。(83) (班固) 西都賦△都人士女、殊異乎五方▽。(84) 漢書・五行志△玩歲而愒日▽。(85) 史記・太史公自序△臣下百官、力誦聖德▽。(86) 史記・鄒陽傳△獨觀於昭曠之道▽、詩・長發△聖敬日躋▽。(87) (呂溫) 張荊州畫像贊序△樂與群下、勵精致理▽。(88) 宋史・樂志△百年曠典、至是舉行▽。(89) (曹植) 贈丁翼詩△滔蕩固大節、時俗多所拘▽。(90) (揚雄) 太玄賦△蕩然肆志、不拘攀兮▽。(91) 荀子・王制△百姓曉然、皆知夫爲善於家、而取賞於朝也、爲不善於幽、而蒙刑於顯▽。(92) 後漢書・劉虞傳△務存寬政、勸督農植▽。(93) 漢書・張釋之傳△秦以任刀筆之吏、爭以亟疾苛察相高、其敝徒文具、亡惻隱之實▽。(94) 左傳・僖公・二十八年△自今日以往▽。(95) 孟子・盡心上△仁言不如仁聲之入人深也▽。(96) 新唐書・魏徵傳△其應如響▽。(97) 禮記・曲禮下△自稱陪臣某▽。(98) 論語・子罕△天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何▽。(99) 漢書・孔光傳△今復拔擢、備內朝臣▽。(100) 書・大禹謨△予

懋乃德、嘉乃丕績▽。(101) 莊子・德充符△哀公異日以告閔子▽。(102) (司馬遷) 報任少卿書△此言士節不可不勉勵也▽。(103) 禮記・孔子問居△子夏蹶然而起▽。(104) 漢書・宣元六王傳△加大恩▽。(105) 忠經・廣至理章△不私而天下自公▽。(106) 書・顧命△眇眇予末小子▽。(107) 論語・顏淵△雍雖不敏、請事斯語矣▽。(108) 書・說命下△敢對揚天子之休命▽。(109) 史記・秦始皇本紀△立石刻頌秦德明德意▽。

菅童子に贈るの序⁽¹⁾

享保甲辰の年、秋七月、菅童子、年一三にして、詩を賦し、未見の書を読むことを試され、とくに二百石を賜り、將軍にまみえ、博士の一員に列した。この時において、都下の「それを」耳にしたものは、驚き感心し、走り回ってたがいに口々に伝え褒め讃え、「百年来のまれにみる盛時だ」と言いあわないものはいなかった。

童子の父上は、医官の李陰先生である。童子は生ま

れながらにして人に抜きんでた優れた才能を持っており、医学を治めることをいさぎよしとしなかったし、經書・史書を読みあさり、美しい詩文を口にするときにも、また「吉備氏の説」すなわち訓読をいさぎよしとしなかった。先生が、学問を学ぶ師について相談すると、「童子は答えて」「どうして師なぞ必要であろうか、どうしてもというなら『赤城』の先生であろうか」と言った。その頃、私はいまだ赤城にいたので、「赤城」とは私を言ったのである。かくて私のもとへやって来た。私は、「彼を」一目みて、優れた才能の持ち主だと識った。「彼の住まいと」私の廬とは、相離れており、幼い童子には通うのが大変であった。「それでも」頻繁に私のもとへ来るので、太宰徳夫（春台）を遣わせ、その勉強をみてやることとした。徳夫は「華音」による読書をを唱えていたので、童子はますますもくもくと勉学に励み、志を奮い起こして「われこそはかの中華の人である」と言った。いくばくもなくしてこのたびの命令がくだったということだ。

この日先生は酒を用意し、童子を主人として、祝宴を催したが、わが弟子たちもことごとく集まり、宴たけなわにして、弟子たちがそれぞれ「童子に」言葉を贈った。

私は言った――

《麒麟・鳳凰・亀・龍・靈芝・朱草は王者の瑞祥である。「それらは」王者の徳が盛んになって、和気が天地の間に溢れ、時空の間に漂い、「その和気」がたがい混じり合い、醸成蒸生したものであって、つねに有るといふものではない。人間もまた然りだ。韓信・彭越・絳侯・灌嬰（といつた武將）が楚漢の際に雲のごとく興り、「漢の」文帝・景帝の際に賈誼・司馬遷・司馬相如・枚乘・欽助・虞丘寿王（といつた文人）がつきつきに出現したのだが、これはむしろその「性」が「普通の人々と」異なるからそうなった、というよりも時代がこれを化したのだ。わが神祖は国内を平定し、戦争を終らせ、平和をもたらしたのだが、はやくから林羅山を京都から招き、「羅山は」その恩

沢に浴し、学問を完成させ、ついに一代の儒宗となった。しかし、この時代は、戦国の余習が完全には除去されておらず、従って文化は京都にのみ存在していたにすぎなかった。しかし、ここ十数年来、文筆の士がさかんに東都において輩出するようになった。王者の住まいする東都が教化の淵源としていよいよ久しきにわたり、ますます盛んになったからではなからうか。かくて、聖人の相い継ぐのは、百年もの久しきにわたる太平が、陶冶して育て上げた結果だと知れるのである。王者の化育がここにおいて盛んになったのである。とすれば、名誉ある俊才は、麒麟・鳳凰・亀・龍・靈芝・朱草の人間におけるものなのだ。

そもそも和氣の至上のものは、いかなる遠方にも届き、いかなる暗闇をも貫き、いかなる辺境の村々をも窮め、あらゆるものうちに到達するのである。童子は、高位高官の家に生まれ、將軍とも近く、はやくから優れた文章を学び、よい身分を序せられる、榮譽これより大なるものはない。とは言うものの、国家の制

度は、崇高にして雄大、三代にも匹敵している。私は諸侯の家臣の末席につらなり、「諸侯の」官職の移動を聞いている。何万石もの増秩、大夫に爵せられること、それは毎年のことであるが、しかし、「このようなことは」都人の耳目には普通のことであり、とくに騒がず、あつさりとして驚かない。ところが今、童子は榮譽ある地位についてといっても、わずかに「博士」という卑しい身分、二百石という僅かな石高でしかない。それなのに驚き感心し、走り回ってやまず、たがいに口々に伝え褒め讃えているのは、いったいいかなる理由によるのであろうか。おそらく、歴代の將軍の聖徳がまさに輝き、広大な明るさが日々に上り、つとめて政治を為し、かくて久しく絶えていた典礼を挙行し、時代の風俗の拘束を打破し、それによって国内の民に、將軍の好むところが学問であり、然るべき時に発令された条例による督励が、たんなる裝飾ではないことをはつきりと知らしめたためであろう。その効果は今日このようにはつきりと現れたのであるが、

とすれば、これ以後、仁を行うという評判は信頼され、民は打てば響くように「それに」応ずる。「童子の榮譽は」どうして、ただ童子一人の榮譽であろうか。われわれ陪臣もまた、「斯文」のためにこれを慶ぶのである。かの童子は、遠く歴代（の將軍たち）の化育、近くは今日の拔擢の恩によって榮譽を与えられたのである。「この榮譽に答えて」ますますその徳に懋め、林羅山公の後を追ひ、その日のために国家に役立つということそが、この家の父子の互いに務め励ましあいながら思うことなのである。先生がそこにいるのだ。私の言を俟つ必要はないであろう。」

言葉が終わると、童子はすつくと立ち上がり、席を離れ言った。

「今にして、私は大恩の私してはならないことを知った。私は愚かではあるが、ますますみずから奮起して上の恩徳の心に答える方法を考えていきたい。」

請われて、書き与えた。

〔訳注〕

- (1) この文章は本文にあるように享保甲辰、すなわち九（一七二四）年、秋七月の作。菅童子、姓は菅原、族は山田。名は正朝、あるいは弘嗣、字は大佐。号は麟嶼、また尚古堂とも号す。父李蔭は幕府の医員。正徳二（一七一一）年の生まれ。麟嶼は早熟な天才として著名、年十三にして本文にあるような榮譽を得た。後、暇を請ひ、京都に出て伊藤東涯の門に入るも、父の疾病を聞き、東帰す。享保二十年三月十九日病を得て没す。年二十四。尚古堂文集。麟嶼遺稿がある。なお、この榮譽にかかわって服部南郭に「贈菅神童序」（南郭先生文集初編巻七）、太宰春台に「賀山田神童登仕序」（紫芝園後稿巻三）がある。
- (2) 「学則」（享保一二年刊行）第一則に「有吉備氏者出、西学於中国、作為和訓以教国人。亦猶易乳以穀、虎迺於菟。顛倒其説、錯而綜之、以通二邦之志。」とある。

(3) 徂徠が赤城に居住したのは享保五年五月十一日から享保九年六、七月の交までと推定される。

(4) 韓信・彭越・絳侯周勃・灌嬰はみな漢の高祖の臣下。それぞれ史記に伝がある。

(5) 賈誼・司馬遷・司馬相如・枚乗・嚴助・虞丘寿王。賈誼は文帝期の文人。司馬遷・司馬相如は武帝期の文人。枚乗は景帝期の文人。嚴助・虞丘寿王は武帝期の文人。いずれも漢書に伝がある。

(岡本)